

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04542

研究課題名(和文) 学生主体のインフォーマルな聴覚障害学生支援の実践的検討

研究課題名(英文) Practical Consideration on Access Support of Voluntary Informal communication for Deaf and/or Hard-of-Hearing Students

研究代表者

金澤 貴之 (Kanazawa, Takayuki)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：50323324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：初年度および次年度に行った実態調査に基づき、聴覚障害学生における主体的なインフォーマルコミュニケーションへのアクセスの可否は聴覚障害学生の「困り感」への気づき、及び周囲の聴学生の情報保障センシティブリティに左右されることが確認された。その上で、以下の実践的検討を行った。1) 聴覚障害学生自身による情報保障に関する「困り感」の発信方法の検討、2) 手話を使える聴学生の養成、3) 音声認識アプリケーション(UDトーク)の活用。これらの活動を通じ、聴覚障害学生を取り巻く集団のセンシティブリティの向上が見られた。

研究成果の概要(英文)：A factual survey in 2015-2016 revealed that the accessibility of voluntary informal communication for hearing-impaired students is determined by others noticing their sense of “feeling lost” and by the sensitivity to the accessibility of those surrounding the hearing-impaired students. Based on these findings, the following practical investigations were conducted: 1) the examination of a method for the hearing-impaired student himself/herself to transmit and communicate their sense of “feeling lost” with regards to information assurance; 2) the training of hearing-impaired students who can use sign language; and 3) the utilization of a speech recognition application (UDTalk). Through these activities, an improvement in the sensitivity of the people surrounding hearing-impaired students was observed.

研究分野：聴覚障害児教育

キーワード：情報保障 小型表示端末 エンパワメント インフォーマル 聴覚障害 高等教育 障害学生支援 音声認識

1. 研究開始当初の背景

現在、高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生の増加に伴い、授業における情報保障支援体制は徐々に整いつつある。しかし聴覚障害学生に生じる障壁は大学生活におけるコミュニケーション全般に渡るものであり、むしろ課外活動等の学生同士のインフォーマルな場での支援構築の相互作用にこそ、聴覚障害学生のエンパワメントの情勢の意義を見出すことができる。

しかしながら、インフォーマルな場での情報保障における課題として、コーディネートの困難さ、支援意識の多様さ、技術的な困難さの3点があげられる。これらの点を考慮しつつ、インフォーマルな場面での支援体制に着目し、フォーマル/インフォーマルな支援並存の重要性を検討していくことが、これからの聴覚障害学生支援において重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、インフォーマルな場での3点の課題を分析軸としつつ、学生主体のインフォーマルな支援の形成過程と役割を実践的に検討することで、フォーマル/インフォーマルな支援の併存の重要性を明らかにする。

3. 研究の方法

以下の方法により実施した。

- 1) 情報保障に先進的に取り組んでおり、フォーマルな場での情報保障体制が整っている大学を対象に、インフォーマルな場での情報保障の実態について聞き取り調査
- 2) G大学内における実態調査(学生サークル、専攻内での活動、課外の研究会など)
 - 1) 2)を踏まえ、3)～5)の実践的試行
- 3) 学生自身で主体的に利用可能なモバイル型遠隔情報保障手段(SNS)の実践的試行
- 4) 手話講習会等の実施による直接コミュニケーションの円滑化の実践的試行
- 5) 手話通訳と文字通訳の混合型支援方法の実践的試行
 - 3)～5)を踏まえ、支援方法を類型化し、
- 6) 類型化した場面ごとの適切な支援方法の実践的検証

4. 研究成果

- 1) 先進的な取り組みをしている大学の实態調査

聴覚障害学生支援の体制が整備されている大学における実践について聞き取りを行った。

その結果として、聴覚障害学生支援において先進的な取り組みをしている大学においても、インフォーマルな場面に踏み込んで支援方法を検討している状況はあまり見られず、学生同士の自主性、主体性にゆだねており、その結果として、学生間の「気づき」の鋭敏さに大きく左右されてしまう状況が散見された。

また、学生同士のインフォーマルな場面に直接的に介入せず、環境設定の工夫など、「『舞台裏』での見まもり」といった間接的な支援を行うケースも見られたものの、専門性の高い一部の教員が個人的に行っている範囲に留まっていることが見うけられた。

2) G大学内における実態調査

G大学においても、1)の他大学の状況と同様に、学生同士の関わりにゆだねられてしまう状況があり、それゆえに、障害児教育専攻など日常的に「障害」について身近に関わっている学生と、その他の専攻の学生とでは、ナチュラルサポートの質に差が出てくることがうかがえた。また、同一専攻内であっても、聴覚障害学生との関係性の近さにより、手話等のコミュニケーションスキルそのものはもちろんのこと、コミュニケーションセンシティビティの磨かれ方にも差が生じてしまうことが示唆された。

また、教育実習や就職に向けた「移行」体験において、フォーマルな情報保障に全面的に頼ることが困難な場面を経験することが、聴覚障害学生自身の障害認識に大きな変化をもたらすことが重要なターニングポイントになることも指摘された。すなわち、自ら友人に支援の必要性を訴えることが必要な場面を経験する中で、エンパワメントが醸成され、周囲の学生に対して負担をかけすぎない範囲で支援を依頼する方法を見つけていくようになっていくということである。ただしその際、周囲との関係性や、フォーマルな支援に関わる者による「見まもり」や「声かけ」によって大きく左右される点にも留意する必要があることも指摘された。

3) モバイル型遠隔情報保障手段(SNS)の実践的試行

フォーマルな場で用いられている連携入力による情報保障(Wi-Fi利用によるタブレット等への字幕配信を含む)ではなく、日常的に学生同士が用いている手段の活用として、SNSのグループトークやチャット機能、およびスマートウオッチを、学生同士で試行的に活用した。

SNSについては、話者自身が音声で話すのではなく、全員が文字ベースで会話を行うことで、聴覚障害学生も含めた全員が同じ立ち位置で会話をするようになるため、聴覚障害学生にとって快適な参加状況が実現された。また、他の学生にとっても、話し手と対面していない状況での3者以上のコミュニケーション手段として、SNSのグループトークは日常的に活用しているため、抵抗感なく使用することができた。

一方、スマートウオッチについては、聴覚障害者自身が発信することが困難であるため、一方的な情報の受け手とならざるを得ず、発表場面など、特定話者による連続的な語りの受信目的にしか利用ができなかった。さら

に、そのような場面においてはスマートフォンやタブレットでの受信の方が利便性が高いため、活用可能性についてさらに検討が必要であると考えられた。

また、特定話者が多くの発話を行うことが想定されたり、SNSの使用が不得手な者が参加していたりする場合に、PC入力も併用可能なSNSを用いることで、PCで別の者が要約筆記を行うことも有効であることが示唆された。

大学における聴覚障害学生支援において、学生個人が使用しているスマートフォンに依存することの是非については慎重な検討も必要である反面、Wi-Fiとは異なり屋外でも安定した通信が確保され、かつ、学生本人が使い慣れているツールを用いることのユーザビリティには大きなメリットが見出された。

4) 手話講習会等の実施による直接コミュニケーションの円滑化の実践的試行

G大学障害学生サポートルームで実施している手話講習会(手話サロン)受講後の学生に対しヒアリングを行ったところ、講習会のみで十分に手話が熟達できるわけではなくとも、自分の中の心理的な「敷居を下げる」効果があり、聴覚障害学生との会話でより積極的に手話を用いようとするモチベーションに繋がるなどの回答が複数得られた。その一方で、学生の主体性を尊重した、自主参加による勉強会ゆえの課題として、系統的な学習が困難であることも指摘された。

また、聴覚障害学生との会話場面を観察すると、単に「手話を用いて話す」というだけではなく、聴覚障害学生が会話への「参入」が難しいことへの気づきができることで、より積極的に、今話していることの情報聴覚障害学生に伝え、会話に誘う様子も見られた。このことから、単に「手話を教える」だけでなく、会話への参入の困難さなど、聴覚障害の特性や困り感についても伝えていくことの必要性が示唆された。

5) 手話通訳と文字通訳の混合型支援方法の実践的試行

研究室のゼミ合宿や歓送迎会など、大学のフォーマルな情報保障の配置ができない場面で、スマートフォン用音声認識アプリ(UDトーク)を用いた情報保障を導入した。その際、「できるだけ話し手本人を見たい」という聴覚障害学生のニーズもあり、手話ができる学生は手話を併用した。また、音声認識字幕の意味が伝わりにくかった時には友人同士で手話通訳を適宜行った。

その結果として、聴覚障害学生が「今、どこを見るべきか」を判断しやすくするため、マイクを持つ、手で合図を送るなど、自分がどの手段で話すかを明示すること、話者交代を明示するために挙手をし、司会が進行を調整することが必要であることが示唆された。

また、手話を併用した場合、音声日本語が不完全なものとなるため、その文字化された日本語が判読困難な部分を含むものとなり、適宜修正する必要があることも示唆された。

6) 類型化した場面ごとの適切な支援方法の実践的検証

特に音声認識を活用した字幕呈示方法を中心について、場面ごとに最適な方法を検討し、その結果をまとめた。

音声の入力方法(直接方式/復唱方式)と字幕の修正方法(学生相互支援方式/専従修正方式)の使い分けに着目し、フォーマル、インフォーマルそれぞれの要素を含む5場面(卒論ゼミ、グループ発表、シンポジウム、聴覚障害当事者が話者となる講演会、研究会)に分類した。

その結果として、フォーマルな場面では復唱方式、専従修正方式を採用することにより情報保障の質を高めることが求められる一方で、インフォーマルな場面では、学生相互支援方式により情報保障に対する意識が働くことで、一定程度聴覚障害学生の参加しやすさを発生させることに意義が見出されるということが示された。しかしながら、

学生の自主性のみ任せると、いわゆる雑談場面では情報保障への意識が途切れてしまうという課題や、それゆえの、障害者差別解消法やインクルーシブ教育のあり方などの概説を行うことで意識付けを図ることで、エンパワーメントや関係者の「歩み寄り」が促進される可能性も見いだされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

山田茉侑・二神麗子・金澤貴之(2017)「聴覚障害学生の障害認識の変化に対する一考察-友人との相互作用における情報保障の捉え方-」群馬大学教育学部紀要 人文・社会学編, 査読無, 66巻, 161-166.

二神麗子・金澤貴之・神塚香朱美・中野聡子(2018)「音声認識アプリを活用したICTと人の協働による情報保障支援」群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 査読無, 第67巻, 197-204.

[学会発表](計1件)

金澤貴之・山田茉侑(2015)「支援体制が整うことからくる矛盾に挑む!」第11回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 2015年12月19日~2015年12月20日, クローバープラザ 福岡県春日市.

[図書](計1件)

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) 平成27年度遠隔情報保障事業ワーキンググループ委員(2016)

「いつでもどこでも」の情報保障の実現に向けて-遠隔情報保障事業成果報告書-」日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan), 108 .

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金澤 貴之 (KANAZAWA, Takayuki)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：5 0 3 2 3 3 2 4

(2) 研究分担者

中野 聡子 (NAKANO, Satoko)

大阪大学・キャンパスライフ健康支援セン

ター・講師

研究者番号：2 0 3 5 9 6 6 5

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

二神 麗子 (FUTAGAMI, Reiko)

群馬大学・大学教育・学生支援機構学生支

援センター・産学官連携研究員

山田 茉侑 (YAMADA, Mayu)

日本財団・聴覚障害者海外奨学金事業留学

生

神塚 香朱美 (KAMIZUKA, Kasumi)

群馬大学・教育学部・学部生